



1996年(平成8年)

1月号(No.608)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

平成7年度自然保護全国集会	1
90周年記念・北陸ブロック行事	2
自然保護随想	3
報告	

第3回山を語る・広河原山荘と私	4
1995年度新入会員の集い	4
第3回写真展	5
三水会20周年記念山行	5
二火会だより	5
講演・ブナを語る	6
海外の山	7
支部だより	8
北海道 山形 東海 富山支部	
東西南北	
小島鳥水翁絶筆	11
短歌・霧迅く	12
加藤大道・上高地の版画家	12
山の切手・4	13
図書紹介	14
『テムズとともに 英国の2年間』	
『修験の山を訪ねて』『山と信仰・立山』『芦峯の自然児・トンコー・佐伯富男追悼集』	
書籍受入報告	15
新入会員・住所変更	16
創立90周年記念事業募金応募状況	16
INFORMATION	17
会務報告	18
会員異動・ルーム日誌	19

▶日本山岳会事務取扱時間

月・火・木・土曜日 10~20時
水・金曜日 13~20時

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜日を除く毎日
13~20時

平成七年度自然保護全国集会 鳥海山のイヌワシ調査報告を中心に

自然保護委員会

本年度の自然保護全国集会は、山岳会創立九十周年記念式典翌日の十月十五日、山岳会会議室で開催された。式典や一連の記念行事に出席されるであろう支部委員の方々の便宜を考え、また新装なったルームを見る機会ともなれば、との発案によるものである。

前日の、皇太子殿下・雅子妃殿下をお迎えして開かれた「ヨセミテからのメッセージ」自然保護フォーラムや、式典の余韻さめやらぬルームに、宮下、中村両副会長、青森はじめ十一支部十四名の各支部委員、一般会員など、四十余名の顔触れがそ

ろった。大集会室にこれだけの会員が集まるとさすがに窮屈。しかしそこは狭いテント生活には慣れている会員の面々、文句も言わずに席に着き、文字どおり膝を交えてのミーティングとなった。

午前十時、篠崎実行委員長の司会で開会。元自然保護委員でもあった中村副会長から「本日は地域の問題が主題として取り上げられているが、各支部委員は地元の人々の意見をよく聞いて進めていってもらいたい」。次いで大蔵担当理事が「私の役目は委員の声を吸い上げ、これをバックアップしていくことにあるので、ぜ

ひ率直なご意見をいただきたい」との挨拶があった。

本日のメインテーマである「鳥海山の自然保護」については、冒頭、沢井委員長から「九五年四月、イヌワシの営巣地が発見されたことにより開発計画にブレーキがかかり、県のイヌワシ問題検討委員会発足のきっかけになったこと、これは他の自然保護活動の参考になるのではないか」との思いから取り上げた旨説明があり、佐藤委員の報告に移った。

佐藤委員はイヌワシ生態調査が平成五年の尾瀬での全国集会で採択され、委員会による学術調査の一環としてスタートしたこと、他に東日本ワシタカ研究会に所属して活動を開始したこと、一昨年十月以来、二年六か月百二十七日を費やしてついに開発予定地付近で営巣地を発見したこと、などを個体識別表と地図、ビ

デオを使って報告した。鳥海山には他に複数のイヌワシ、さらにクマタカの生息が確実であり、この山一帯が、最高に生息環境の整った山ということになる。積雪期、標高六二〇メートル地点は岳人だからこそ近付きうる場所であり、ルームのワイドテレビに鮮明に映し出された営巣地と雛の姿を、一同熱心に見つめていた。

意見交換の場では、「この調査作業を自然保護推進のための基本調査として予算化し、JACCの山岳研究の一環として位置づけ、継続的にフォローすべきではないか」「国定公園鳥海山の全域をとらえて特別保護区の地域指定の変更を働きかけてはどうか」「イヌワシを観光資源としてみたらどうか」などの意見が出されたところで、午前の部は時間となった。

休憩時、リフォームなったルームを初めて訪れた会員たちは、ラウンジの展示品や図書室を興味深げに見ていた。

午後は各支部からの報告となった。
●宮城・熊谷委員 里山開発のこれからが心配。

●越後・五十嵐支部長 飯豊山系の砂防ダム建設にあたって建設省地建工事事務所から意見を求められている。

●静岡・西郷委員 富士山を世界遺産へ登録させようという運動が県民一体となって進められている。

●東海・小川委員 登山家独自の活動として環太平洋一周地球環境調査登山隊を編成、酸性雨などの汚染調査を続けている。

●京都・塚本委員 無意味な標識や登山路のショートカットが多く見られるようになった。山の荒廃につながるので気をつけたい。

●石川・太田委員 白山に元来ないコマクサを移植した人がいて困っている。植生分布を意図的に変えるのは自然破壊ではないか。

●関西・斧田委員 地震による六甲の登山路の破壊とイヌ、ネコの野生化が問題となっている。

●福岡・児玉委員 屋久島は自然保護の手の入っていない未開地。今後ますます観光地化されるだろう。

●熊本・本田支部長 支部会員が各自自然保護団体に所属し、活動している。

●尾瀬・平野委員 各山小屋での浄化槽設置が完了。宿泊予約定員制による分散化に成功した。

次いで信濃、青森両支部からは現在最も注目すべき問題点が報告された。

●信濃・植松委員 松本から白馬まで長野県の五分の一を占めようかという「建設省国営アルプスあずみの公園リゾート構想」への対応に苦慮している。これによって蝶ヶ岳、常念岳、餓鬼岳稜線山麓が危うい。この計画地域内で希少種のタカノ一種ハチクマを発見。ゴルフ場予定地が餌場となっており、このことから、この営果環境を守ることを当面の活動目標とする。問題は、この里山が開発されることが引き金となって必ず山岳が破壊されるということである。

●青森・根深委員 当初、白神山と赤石川流域の住民の方々の話を聞いた結果として、自然環境の維持、地域振興が同じ方向性をもって考えられなければならないという理念のもとにやってきた。その後、森林生態系保護地域となり、世界遺産に登録されたことから、いろいろな問題が発生している。自然保護の名のもとに営林署が掲げる立ち入り禁止もそ

のひとつである。目的がオーバーユースとゴミのためであるのに、従来からここで生活している地域社会の人々までが立ち入り禁止の目にあうという結果となり、山に入ること自体が罪悪視されるような有様だ。

最後に「あずみの、白神、屋久島については今後とも委員会としてフォローしていきたい」と沢井委員長から発言があり、宮下副会長の「全

日本山岳会九十周年記念 北陸ブロック行事報告

石川支部

創立九十周年北陸ブロック記念行事を石川・富山・福井三支部の合同で、十月二十一・二十二日にかけて行った。金沢シテイモントホテルの大ホールを会場に、二十一日午後四時からの式典には各方面約百四十人が参加した。本部より十四日の本

部式典に続き、二週間連続のハードスケジュールにもかかわらず、藤平正夫九十周年記念事業実行委員長、中村純二副会長、小倉茂暉常任評議員、中川武常務理事にご出席いただいた。

増江石川支部長の開会挨拶に続き、藤平実行委員長はマカルー遠征の総隊長としての思い出話や、日本山岳会創立の経緯、さらに「山岳会を創

国に種々の問題が生じており、具体的に動かねばならない案件が山積みしている。自然保護委員会、日本山岳会が何をなすべきかを考えていきたい」との閉会の挨拶で、ルームでの全国集会は幕を閉じた。

休日で静まり返った市ヶ谷のビル街に、秋の陽射しが柔らかに差しかかっている午後三時過ぎ、来年の再開を約して帰途についた。(松本恒廣)

るのは容易だが山岳会を存続するにはそれなりのエネルギーが要る。その意味で日本山岳会の諸先輩に深く敬意を表する」旨挨拶された。

続いて中村副会長は、北陸にゆかりの深い元副会長・深田久弥氏の「人々は名山に群がるけれど、自分には人知れず静かな山が好きだ」という言葉を引用され、その意味では北陸は自然豊かな奥深い山々がたくさんあり、恵まれている。一人ひとりが自分自身の山の登り方を考え、自由な登山をしてほしい、と話を結ばれた。

ここで本部記念式典のおり上映されたVTR『人を讃え山を究める』を再映し、日本山岳会のマナスルか



記念山行は紅葉の医王岳

らマカルー東稜までの歴史をかいま
見た。

続いてマカルー遠征隊重廣恒夫隊
長の記念講演に移り、重廣隊長自身
の山との出会い、山との関わり方か
ら始まり、ヒマラヤ八〇〇〇メート
ルの時代、バリエーションルート、
ディレクティシマ、さらに縦走登山
へと、ヒマラヤ登山の段階的歴史を
わかりやすく話された。さらにスク
リーンに映しだされたスライドに、
我々はマカルーの雪稜へと引き込ま
れていった。

式典は中村義福井支部長の閉会の
挨拶で終了。記念パーティーまでの
間、ロビーでは支部会員による写

真展が人を集め、JACグッズの販
売も好評であった。

十三階のスカイバンケットに会場
を移してのパーティーは、関西支部
の桑田結会員も加わり六十七名が参
加。本部の小倉評議員の挨拶、吉川
石川県山岳協会会長の祝辞、中川理
事の乾杯の音頭と続き、本部、支部
の連帯感は大いに盛り上がり、最後
は木戸富山支部長の三本締めと全員
集合の記念撮影でお開きとなった。

翌二十二日、夜汽車で駆けつけた
東京の穴田雪江会員と関西の宗実慶
子会員が合流し、中村副会長、中川
武常務理事を含む三十二名が「医王
山」への記念登山に向かった。

見事な秋晴れの中、紅く色づいた
山道をみな思い思いに歩く。低山な
がら浮き草の生育する大沼、山椒魚
が潜む三蛇ヶ滝、天空を目指すよう
な鳶岩と、変化に富んだ楽しい山行
であった。下山途中でのアケビの収
穫もあり、中村副会長の「低い山だ
けど山全体が昔からの自然林なのが
嬉しいネ」という言葉に、何時ま
でもこの自然を残さねばと心に刻み
つつ、山を下った。

終りに一時間半も講演してくださ
った重廣隊長と、準備段階で、いろ
いろアドバイスをくださった中川常
務理事はじめ本部役員の皆様に、心
からお礼申し上げます。(中川博人)

自然保護随想

我々は鹿より 賢いか

大森弘一郎

昔山歩きを始めた時まず手ほど
きを受けたのは、鉈目のいれ方、
高山植物帯の草地でのテントの張
り方、雨の中で生木に火をつける
方法。今そんなことをしたら、そ
れこそ大変。教えねばならないこ
とが「道から出ないこと」「火
を燃やさないこと」「高山植物
を踏まないこと」とは。

私たちが自分の喜びを広げよう
として仲間をふやした結果、山が
損なわれだし、自然の自己回復力
を超えてしまった。その結果、こ
れらの楽しみを禁止しなければな
らなくなるとは、何と矛盾に満ち
たことか。しかもそれを楽しんだ
人間が禁止の推進をしなければな
らないというのも皮肉な現象だ。
私たちは山を舞台にしているが、
これは地球環境問題そっくりの縮
図でもある。人は誰もが家族をも
ち、友人が多く、健康で、長命で
あることを願い、今の生活を当然
とし、さらにより豊かさを求める。

そして自分だけがよければよいと
考えがちだ。その結果、地球の人
口はふえ、資源消費も爆発的にふ
えて、ついに地球環境への負荷が
回復力を超えるところにきてしま
った。しかしその根本の自己抑制
問題は解決することができない。

天敵のいない北海道の狭い島に
放たれた三頭の鹿は、百倍にふえ
て島内の餌を食いつくし、絶滅し
たというが、人間も鹿のように愚
かであろうか。山における私たち
の行動が鹿より利口なら、もしか
すると地球環境問題に解決のヒン
トを提供するかもしれない。

山の自然を独占せずに多くの人
に分かてば、山そのものが破壊さ
れる。それに対する方策はいくら
でもある。ただ人間の集団がそれ
をやらないだけ。これを「やる」
という難しい課題が自然保護のよ
うだ。「知って・考えて・行動す
る」その最後が一番大変である。
求められているその行動を、いか
に増幅し合い、助け合い、広げる
か、その資格の有無は不問にして。
クリーンな人も、罪状を自覚す
る人はなおのこと、この「やる」
ことの行動に参加していただきたい。
多分この自然保護の行動に、
「やりすぎ」はないだろうか。

報
告

REPORT

第三回・山を語る

広河原山荘と私
——塩沢久仙氏に聞く——

図書委員会

昨年十月二十六日、夕方から二時間にわたり、南アルプスと山小屋運営について塩沢久仙氏に語ってもらった。以下はその報告である。

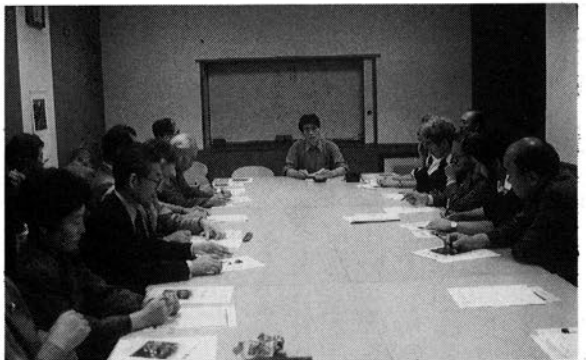
私（塩沢氏）は昭和三十三年に初めて北岳に登った。当時、南アルプスは夜叉神峠まで来ていたが、北岳山荘はまだなかった。南アは北と違って林業の小屋が登山者に開放されており、二食付き米持参で三百五十円の頃である。四十二年、山で暮らしたいと思って夜叉神小屋に入った。

五十三年に山梨県直営の北岳山荘が黒川紀章氏の設計で建設された。私は夜叉神小屋にいて、無縁係として、また南ア診療所開設などで山荘に協力した。二年後、山荘は県から芦安村に移管した。五十七年、南ア地域に一〇〇ミリを超える雨台風が襲い、山小屋が貧弱なことが問題

になったこともある。

六十年六月、村営の広河原山荘が竣工。広河原は南アの玄関口である。私は夜叉神小屋を後輩に託し、運営を引き受けることにした。そこで先輩の燕山荘、涸沢ヒュッテなどで話を聞き参考にした。五年間ほどは赤字続きで、最近やっと小康を得ている。客の応対、食事、設備が運営の中心だが、一泊二食付き六千百円で限界があるものの、清潔を心がけて努力している。また、毎朝食時に天気予報と登山道情報を知らせている。六十二年に北沢峠にバスが入るようになった。アルペン・プラザもできたので、その奥にスペースを確保し、県美術館の応援を得て、陶芸、版画の作品展を常設、山岳画も展示販売している。また、山好きの音楽家の協力を得て、N響奏者中心のクラシック『谷間のコンサート』を春秋に開催している。

宿泊者の年齢層は高くなってきており、昨年は五十歳代が一位であった。男女比率は現在男七女三だが、女性の高齢者が増え、間もなく同率



南アルプス山小屋の昨今を語る塩沢氏

になると思われる。したがって小屋への依存度も高く、ガイドブック、地図、軍手、懐中電灯や電池が小屋の売店でよく売れる。また非常食も持っていない人が多い。旅行会社の四十〜五十名のツアーが増えているが、この場合は登山の心構えもない人たちだから、指導的立場の人が必要だ。遭難救助は山小屋主導で行っているが、救助対策にその都度追われている。ヘリとボッカ（七五キロまで）で対応しているが、謝礼のみで奉仕である。

ゴミ問題は大変よくなり、山梨岳連レンジャー隊の話でもゴミは少なくなっているという。小屋もヘリで

ゴミを下ろしている。現在の問題はトイレと洗剤の末端処理である。昨年七月〜十月に南ア倶楽部が北岳ほか四か所で酸性雨の定点観測を行ったが、汚染は少ないとの結果が出ている。毎年続けて基本データを取り指針としたい。

六十年十月に山梨県高山植物保護条例が制定され、二十二種の希少種が保護された。全国的な保全種はキタダケソウ、ハナショウブ、レブンアツモリソウの三種だが、南アには希少種が多い。保護区域として二七〇〇平方メートルを立ち入り禁止として、パトロールを行っている。

最後に、寛政の頃、北岳頂上に安置されていた大日如来を再現し、奉納するのが夢である。（三沢二三）

一九九五年度

日本山岳会新入会員の集い

総務委員会

昨年十一月十八日、新入会員のオリエンテーションが本会ルームで開催された。対象者は昨年二月から九月までの入会者（会員番号一一九一三〜一二二〇一）百八十九名で、うち六十二名が出席した。

会は大屋常務理事の開会の辞で始まり、村木会長は歓迎の言葉の中で「日本山岳会は皆さん方に登山をお



山岳会ルーム前に勢ぞろいして記念撮影

新入会員のメッセージを二、三紹介すると、兼森志郎会員(広島市)「この機会に広島に支部を作る運動を、と思い活動中です」。高橋久枝会員(茅野市)「広く山を愛する人たちと出会いたいと入会させていただきました」。木本礼子会員(大分市)「祖父が会員だったこともあって父に勧められ、父と弟と三人一緒に入会しました」。

引き続き懇親会に移り、交流の輪を広げあい、記念写真を受け取って散会した。(会報編集委員・伊藤敏)

第三回写真展

「心に写る山々」を終えて

アルパインフォトクラブ

教える登山学校ではない。自分の山登りをお持ちの方々が集まって、同志的なグループを作ってゆく、考え方の異なる人々が互いに刺激しあってよい山登りを目指す場である、ということを考えていただきたい」と述べた。

続いて中川常務理事から「本会の組織と活動について」説明とビデオ放映があった。参加者全員の記念写真撮影の後、南川山岳編集委員から「日本山岳会の歴史について」の講話があった。

新入会員の自己紹介と意見交換は二グループに分かれて行われた。

平成七年十一月十八日(二十七日、東京・新宿の三省堂文化会館エントランスホールで第三回写真展が開催された。「心に写る山々」と題し、会員三十七名の作品五十点を展示、さらに今年も風見武秀名誉会員(日本山岳写真協会会長)の特別出品があり、写真展は一層盛り上がった。期間中の来場者は八百名近く、山岳会の仲間や友人、遠くは山梨、静岡からの来場もあり、クラブ員一同心より感謝しています。展示作品を見て批評をいただくことが何よりの励みとなる。

例年は写真展終了と同時に作品は返却されるのだが、今回は鳥取県伯耆国山岳美術館の吉川明秀会員の提案で、山陰支部との合同写真展が同美術館で一月中旬から三月中旬まで開催されることになった。

写真展開催目前にネパールから悲報が届き、クラブ会員の入澤郁夫さん、田邊史さん、石井恵美子さんが雪崩に遭い、帰らぬ人となってしまった。ついこの間、立山での富山支部との合同撮影会では、入澤さんと田邊さんが楽しそうに剣岳の勇姿をカメラに収めていた。参加された方々は、夕食時の懇親会での話など、お二人の姿が目に残っていることと思う。今回の写真展に石井さんは「カラコルム」田邊さんは「白馬岳」を出展されていた。三人のご冥福を心より祈ります。(北村義男)

二十周年記念山行

天覧山

三水会

日本山岳会九十周年記念の式典に続き、三水会も二十周年祝賀会を十月十九日に挙行、熱気のためやらぬ二十二日、奥武蔵で記念山行を行った。

高麗駅前定刻の十時には、山梨県や、遠くは名古屋からはるばる参加

した岳友も交え、総勢五十四名が集い、点呼、ストレッチ体操の後、巾着田、高麗峠を経て、名峰天覧山へと向かう。

天候に恵まれて、奥武蔵の秋の展望・情趣を満喫し、昼は十六羅漢下の公園広場で先行したリーダースタッフが準備した温かいおでん寄せ鍋に秋の味覚を堪能し、加えて薬湯の大盤振る舞いで宴は大いに盛り上がり、はては輪になって、山の歌の大合唱。全員の記念写真撮影を終えての下山、途中能仁寺に参詣、思い思いの祈願を込め、門前にて解散した。さらに有志は飯能駅前髭の武蔵にて三水会二十周年記念事業の打ち上げを済ませた。

天覧山は標高二〇〇メートルに満たない低山だが参加者一同、初心に帰っての山歩き、三水会ならではの和気藹々二十周年記念にふさわしい豊かな山行であった。(勝田房治)

二火会だより

ブナ林に想いを馳せて

二火会

七月と十月の二回にわたり「ブナ林から樹海へ」「ブナの森を語る」というタイトルに心ひかれて、二火会の講演会に参加しました。

講師は専修大学付属高校で教鞭を

とられる小岩清水氏です。先入観から難しい内容ではと緊張していたところ、開口一番「日本人は物事を直線的にとらえ突き進んでいく、横に目を向ける発想が少ない、横に目を向けることによって広がりができるしみ方も多くもてる」と。つい頷いてしまいました。そして、おもむろに模造紙を広げ、色分けされた世界地図で森林分布の過去、現在の状況を比較しながらの説明です。

「地球規模で広がっていた森林がなぜ消えていったのか……。それはヨーロッパの産業革命に端を発した開発が大きな影響を与えていった。日本の森林分布状況も同じことで、人が移動している間は文化の定着は見られない。定着したことによって日本の森林も消えつつある」と言われ驚きました。しかし日本は明治の初め頃まで、藩政や集落の中で守られてきた森林があり、樹々があり、歴史もあつたということです。文化の発展と森林との深い繋がりについても話され、また、世界に比べ日本にはブナ林を含め各地に森林がまだまだ残されているという貴重な話を聞くことができました。

第二部では「森林を楽しく見るには、頂きを追いかけるのではなく、『山』全体を見つめ、森の中を何度となく歩くこと、ブナ林も通過する

だけでなく、足を止め、定着し、四季折々の森に出会い、同化していくことが大事である」という、頂きを追求める一人として反省点の多い話でした。

小岩氏のフィールドワークとも思える富士山麓に広がる青木ヶ原樹海の話も興味深いものでした。青木ヶ原樹海といえは自殺の名所ぐらいいにしか心に留めていなかったことが、思いもかけず樹海の接し方、楽しみ方、歩き方などなど、何度となく探訪された経験を通しての話は、手に汗を握る場面もあり、恐怖心に駆られながらも樹海に対する認識を新たにしました。そして、一度は樹海に足を入れてみたいという衝動をもったのは私だけではなかったようです。二時間では語り尽くすことのできないほど、深い深い森、林の話でした。今後、山に登ってブナの樹々に出会ったとき、見る目が違うような気がしています。(石光久仁子)

講演・ブナの森を語る

小岩清水

ブナの森は、特定の場所にしか残存していないかのように喧伝されているが、まだ日本各地に美しい森として残されている。しかし、東北日本を包み込むように分布した時代か

らずに百年を経て、現状は極めて限定された状態下におかれている。

動植物は、ある個体数以下に減少すると、種の存続が急激に危うくなるのは、佐渡のトキの絶滅によく現れている。現在のブナの森が、種の保存の面からどのように位置づけられるかは明確ではないが、かなり危機的状況に接近しているように受け取られ、白神ブナ森林保護運動に代表される自然活動実践派の人々の関心が高まっている。

ブナの森は、単純にブナによって構成されているのではなく、ブナ、ミズナラ、トチ、ホオ、カツラ、ハリギリ、サワグルミ、クリなどの高木を主な構成樹として、中間樹にカエデ、タムシバ、ツツジ、オオカメノキ、シャクナゲ、キブシなどやシラクチズル、マタタビ、ヤマブドウ、ツルアジサイに代表されるツル植物が分布し、地表から樹冠まで調和した美しさが価値の高い自然環境として認められるのである。

この環境条件下では、地表下の土壌から、樹冠域まで濃密な動植物世界が展開していて、その世界の完成度の高さは、小宇宙を見る思いがする。そして人間は、意識するしないにかかわらず、ブナの森の恩恵の中で歴史を歩んできたのである。つい半世紀前まで人々はブナにかかわら

ず身近な森林に対して感謝し、黒々と広がる森を畏敬の心で認識したし、そこに人間界とは微妙に異なる自然神の世界を描出して、人が人として奢ることのないように、自らを戒める究極の叡智を体得し、伝統としていた。科学の名の下に、叡智が頹廃したのは、科学が利益に繋がることをのみ強調した時代的誤謬が、一時的に人々の精神を歪めたからである。

今、科学は本来の真理探求の道を明らかにし、一方では自然活動派の人々が現実の自然変化の中から異変を鮮明にし、科学的理論と現実観察が一致していく時代を迎えた。科学の一部を判断基準とし、総合的視野を失っていた時代から、人として総合叡智を回復したのが現在である。

錯綜と混沌が収まらない段階でも、自然界は調和の妙味を見せてくれる。私たちはブナの森を歩くだけで完成された調和を学びとることが可能となる。そこに、繁茂する葉の増加期と枝の柔軟性の高まり、光合成結果として放出される酸素と人の関わり、落葉堆積と土壌生成、豊饒な命の水、樹木根系で保たれている土砂礫の安定や、そこにまた成立する動物の営みが視野を経て心に投影されてくる。ブナの樹は、極めて安価に伐採されて、ある情報によれば一本が五千円程度ともいわれる。しかし二百年

から三百五十年も生きるブナは水資源確保、土壌生成、酸素供給、砂礫固定効果の基礎に加えて、大小動物の生息域などとしての重い役割をもっており、これを正しく評価するならば、現在進行している伐採は、恐ろしいまでの不当評価であり、人間社会の将来について荒廃を拡大していると考えざるを得ない。現在に生きる私たちが、現在を荒廃させるのは仕方がないとしても、少なくとも三百年から、あるいは回復不能な彼方までに及ぶ絶望的荒廃を作り出すことは許されることではない。

ブナ林には、狩人たちの、川漁師たちの、林業者たちの、農業者たちの、海に生きる人々のブナ林と、それぞれ人間全体を包みこんで止まない豊かな息吹が満ちている。

多くの人々にブナの真価と、現在ブナが受けている不当極まりない評価が、結果的に将来環境をいかに危機的状態にするかを直視してくれるよう願っている。

＊注記 以上は十月十七日、二火会席上で話す機会を与えていただいたものの概要であり、機会を与えてくださったことに深く感謝いたします。なお、話の中でブナの葉重量、保水量、腐葉土量とその金額換算の点で数値を一桁多く表現しておりました。訂正し、お詫び申し上げます。

海外の山 日本山岳会 の明日

江本嘉伸

二十一世紀まであと五年。その幕開けに思うところを書いてみたい。はじめに質問。

スイスの著名な登山家、エアハルト・ロレタン(三六)とフランスの代表的クライマー、ブノア・シャム(三四)の二人が九五年十月五日、カンチエンジュンガ(八五八六メートル)でどのような登山を行ったか。答え。二人は別の隊として七七〇〇メートルの最終キャンプを出発し、ロレタンはジャン・トロワイエ(四六)とともに無酸素登頂。シャムはウエスト・コル(八四五〇メートル)付近で頂上から下りてくるロレタンらと出会ったが、その日は頂上直下でビバーク、翌六日アタックを再開し、そのまま行方を絶った。

重要なのは二人がそろって「八千メートル十四座目」を目指していたことだ。つまり、ロレタンは、イタリアのラインホルト・メスナー(八六年に達成)、ポーランドのイエジ・ククチカ(八七年のちにローツェ

南壁で遭難死)に次いで世界で三人目の「十四座全てに登った人間」となり、不運にもシャムは登頂の成否がわからぬまま帰らぬ人となった。

八千メートル峰が次々に陥された一九五〇年代から六〇年代のはじめ、ヒマラヤ登山は国家的威信をかけた大遠征の形をとった。一つ一つの頂に探検の要素があり、それだけの価値があった。第二登、第三登となっても、その傾向は続いたが、やがて国旗を頂上に掲げ持つことに疑問を抱く登山家が出てきた。山は自分のために登る。そう言い切る人たちが新たに開拓者となり、高峰を総なめにしていった。ロレタンたちのカンチエンジュンガは個人志向の強いヒマラヤ登山の現状を象徴するものだ。四十四年前のことになる。マナスル隊先発隊の出発にあたって、先隊長での中に日本山岳会会長をつとめる今西錦司は「山登りというものは、四つの段階を経て発展する」と述べている。

第一の段階は「山の発見」第二は「その探検」第三の段階は「いよいよその山に登る」そして第四の段階は「初登頂のすんだ山へヴァリエーション・ルートから登る」である。(『ヒマラヤを語る』)

これは当時としては正論だったで

あろうが、「初登頂」の幸運に恵まれにくい現代の山登りにはもっと素朴な「四つの段階」があるようだ。たとえば、第一の段階は「できるだけ高い山へ登る」第二の段階は「高くて困難な山へ登る」第三の段階は「高くて困難な山へいくつも登る」そして第四の段階が「年をとってもますます登る」というふうだ。これは国内の山であると海外の山であるかを問わない。八千メートル峰十四座全山登頂にしても、つきつめれば第三段階の「高い山へいくつも登る」の発展した姿にすぎない。

登山を個人の人生の中で考え、実行してゆくの主流になっている実情は、個々の登山の普遍的価値が見いだしにくいことを意味する。日本山岳会のような伝統ある組織が長い間霧の中を彷徨っているように見えるのは、自分の中に新たな価値を見いだせないでいるからだろう。

そこで提言。日本山岳会が将来「百周年」を記念する事業を志すならば、思いきって冒険を試みてほしい。「祝宴」をいかに盛大にするかよりも、批判的視点も折り込んだ決して自賛であってはならない「登山百年史」の制作や、世界各国に通用する「登山国際用語辞典」の発行など世に問う仕事はいくらでもある。

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

北海道支部

野幌森林公園 自然観察ハイキング

自然保護委員の担当行事として、
六月四日に南区豊滝・盤の沢コース
を予定していたが、悪天中止となる。
それを再度十月十日に、場所を身近
な野幌森林公園に変更して実施した。
当日は朝から快晴で、公園内の北
海道百年記念塔前に十一名が参集。
野田支部長が、この観察会のために
『野幌の自然』という解説書を作り
配布した。

十時出発。記念塔広場を美しく飾
っているハイマツは、ヨーロッパ・
アルプス産のモンタナ松という。こ
こ野幌丘陵からの展望は、樽前山か

ら手稲山にかけて一連の山々が、澄
みきった青空にそびえ立っている。

今から数百万年昔、激しい火山活動
が繰り返され、札幌西部の山地がで
きた。漁岳から札幌岳にかけて台地
状に見えるのは、その火山活動のか
つての溶岩台地であったとのこと。

野幌森林公園のトドマツなど北方
系針葉樹は、氷河時代の生き残りで
あると説明され、見識を新たにす
る。また、南方系植物との接点もあり、
クリ、コナラは野幌付近が北限とさ
れ、エゾユズリハ、ハイイヌガヤは
南方系の常緑樹だが、北海道日本海
側の深い雪に埋もれて、厳しい寒さ
に耐えられるように適応したもの
のことで、ふだん何気なく接してい
る植物の生命力に驚かされる。

このところ天候不順で日照時間が
少なく、紅葉はあまり冴えない。ツ
タウルシだけが陽射しに映えて深紅
に燃え、大きなハルニレの古木には、
森の守り神フクロウが止まっていた。
皆に望遠レンズで覗かれ、人気を集
めていた。大沢コースから瑞穂の池
をめぐる、野田支部長のユーモラス
なわかりやすい説明を受けながら、
十五時に開拓の村に到着して解散。

ただ漫然と山道を歩くのではなく、
もっと自然環境に目を向け、山の楽
しさを享受しなければと、啓蒙させ
られた一日であった。(高澤光雄)

山形支部

秋期例会―飯山・名勝沼

秋期例会は十月二十九日、真室川

町の女飯山(九七九メートル)で実
施。参加者十七名はJR大滝駅に集
合、前森山林道コースから入る。天
候もよく、久々の親睦登山となった。

女飯山は山形、秋田の県境に位置
し、丁岳、加無山とともに山形県の
「加無山県立自然公園」に指定され
ている。この山塊は奇岩重畳とした
岩山で、主として安山岩、流紋岩か
らなり、偏東積雪による浸食により
山全体が急崖の岩峰で、特異な山岳
景観を見せることから、岳人の人気
は高い。

飯山は、男飯、女飯という双子の
山で、一般登山路は大滝飯山道が男
飯に拓かれており、独峰天を突く頂
上からは、付近の山々が一望できる。
このたびは登山路の不確かな女飯
山に敢えて挑戦ということで、一週
間前に下見登山を行っている。車の
終点でミーティングを終えて出発。

紅葉が見ごろのブナ原生林を縫うよ
うに登り、昔を忍ぶ飯峠に着く。こ
こから胸を突く急登、まるでロック
クライミングである。幸い木枝、草
根があり、手足を巧みに使い分けな
がら登る。一時間余りで女飯山頂に

飛び出す。足元から約三〇〇メート
ル切れ落ちる断崖と景観に歓声が上
がる。周囲の山々が一望され、鳥海
山、月山、葉山、神室連峰、遠くは
秋田県の山々が見える。

記念撮影をして、男飯方向へ下山
間もなくコルへ着く。予定の時間よ
りかなり早いので、全員の賛同を得
て、男飯山に挑戦することになり、
再び急登。山腹から今登ってきた女
飯山、名勝沼の景観に一同大満足し、
男飯山頂に着く。再び周囲の山岳景
観を楽しむ。

下山にばかり、ブナ原生林に静か
にたえずむ名勝沼に着く。昼食。素
晴らしい周囲の紅葉を眺めながら親
交を深め、帰路となる。途中、女性



登山道の不確かな女飯山に敢えて挑戦した一行

会員から、今日の楽しい登山のお礼に清掃登山をしましょう、との提案があり、時間もあることから全員賛同、帰りは各人ビニール袋一杯の山の味覚ならぬ空き缶、ゴミを収集しながら下山。まことに心さわやかな登山であった。
(菅原富喜)

東海支部

伊吹山播隆祭

東海支部員の稲葉省吾君(会員番号八六七五)は岐阜県大垣生まれの大垣育ち。近くの神戸町に住んでいるが、いずれにしろ朝夕伊吹山を眺める生活。長じて郷土史にも興味をもち、経営していた飲食店も廃業し、今は大垣市の遺跡発掘の穴掘り人足である。

その彼が、播隆上人の笠ヶ岳再興、槍ヶ岳初登頂は登山愛好家なら誰でも知るところなのに、播隆上人が伊吹山周辺でも長く修行し、遺跡も多いことを知る人は意外に少ないことは残念と、播隆上人ゆかりの人々、地元関係者に働きかけ「伊吹山播隆祭」なるものを企画した。

東海支部は昨年北アルプスの岐阜県側玄関口である上宝村の広報テレビ「笠ヶ岳と播隆上人」(仮題)の撮影に協力した経緯などもあり、東

海支部が主催し、地元有力企業が共催することになった。

当初は稲葉君としては、たんに上人の遺徳を称えるだけでなく、過疎化した春日村川合地区の村おこしの一助になればとの思いもあり、村当局の主催にしたい考えもあったが、「宗教行事の一面」があるとのことと断念した。しかし今後は「文化行事」として見てもらいたいと関係者は考えている。

播隆上人の命日に当たる十月二十一日、国見岳スキーロッジで開かれた前夜祭には、東海支部員のほか富山から駆けつけた上人ゆかりの中村一族(播隆上人の姓は中村)の人た



播隆上人ゆかりの如来像を祀った阿弥陀堂の仏事

ち十人を始め、地元関係者も出席されて、夜遅くまで語り合った。

二十二日当日、伊吹山池谷峰の播隆上人屋敷跡から引き取った如来像が祀つてある春日村笹又の阿弥陀堂で、揖斐側町の上人開基の城台山播隆院一心寺住職等による仏事が行われた。

仏事終了後の挨拶で尾上支部長より「上人が笠ヶ岳の再興に成功し、笠ヶ岳から望んだ槍ヶ岳を次の目標に定めて果敢に挑戦したことは、たんに宗教的意味合いだけでなく、現代の我々の登山に通じるものがある。ヨーロッパにアルピニズムが興る以前にこのような快挙が成されたことは我々の誇りとするところである」

といった趣旨の話があり、ついで上人の子孫の方から、このあたりでの上人の足跡についての説明がなされた。

続いて阿弥陀堂のすぐ下にある国歌発祥の地・さざれ石公園で池田町のききょう太鼓が西濃運輸により奉納された。この地に出土する「さざれ石」は石灰質角礫岩といい、石灰石の小石が固まって巨岩となり、地表に露出して苔むしたもので、平安朝時代、惟喬親王に仕えた藤原朝臣石位左衛

門がさざれ石を見て詠んだ歌が、「わが君は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで」

太鼓演奏終了後丸一製菓より「伊吹山葉草弁当」が提供され、葉草茶や葉草入り鮎汁とともに日ごろの毒気を洗い落とした。

食後、我々山岳会員にとっては一番のメインイベントである、今日のために稲葉君と大垣山友会が丸四日間を費やして密生する笹と小灌木を切り開いて作った、播隆上人時代に利用していたという登山道から伊吹山中腹にある播隆屋敷跡のある池谷峰(通称カワト九〇六メートル)へ

明日を築き業界をリードする

コンクリート製品の総合メーカー

前田製管株式会社

本社/酒田市上本町6-7

☎ (0234) 23-5111

登山した。静かな森の中の播隆屋敷跡の碑のある前でしばしの休憩を楽しんだ後、自由解散した。

この催しは来年も行いますので、興味のある会員はぜひおこしください。
(中世古隆司)

富山支部

立山・黒部 撮影会の報告に代えて



立山撮影会の参加者 入澤、田邊両氏の顔も見える

昨年九月三十日と十月一日、立山室堂周辺で撮影会を実施した。これは、フィルムビデオ委員会と富山支部の初めての共催事業であり、JACフォトビデオクラブに共催していただいたものである。

集合は三十日午後五時、雷鳥荘ということであつたが、気の早い(熱心な?)人は紅葉の立山を写す心に逸り、五日前から入山して雷鳥沢にテントを張り、撮影を続けていた。たいていの人は、前日または当日の早朝に室堂平に到着して、三山を縦走したり、みくりが池に映える草もみじの雄山を撮影したりしている。夕方五時になると、全員が雷鳥荘に集まってきた。

参加者数は県外二十七名、富山支部八名。

六時半からの夕食及び親睦会は、藤平前会長が差し入れてくださった富山の銘酒立山と銀盤で宴が盛り上がる。酒の肴は、高柳文史手作りのカタクリの葉やワラビの昆布じめこの珍味は大好評。

宴会半ばに羽田委員長から、写真の持つ歴史的、社会的、芸術的意義についてのお話や、シャッターを押すのは、心に感動を受けたときにすべきである、その時、狙いをしっかりと見定めることが肝要である等々カメラを持つ人の基本的な心得につ

いてのご意見を拝聴する。

宴会終了後もテイルームでカメラ談義が延々と夜中まで続く。部屋の電灯が消されても、なおカメラを持って外へ出て行く人もいる。秋の夜空の星を写すためである。三十分も星空とにらめっこをしている。側にいる人が「空に向けてフラッシュをたけば、星が一層きれいに写るのではないか」とひやかす。夜更けまで、というよりは夜明けまで撮影が続く。

翌朝は七時に宿の前に集合して記念撮影を行う。その後、各自思い思いの場所にカメラと重い三脚を持って散っていく。ある者は別山乗越へ、ある人は浄土山へ登る。大部分の人は、バスで弥陀ヶ原方面に下る。美松坂や弥陀ヶ原は紅葉の真っ盛りで、ナナカマドの赤、ダケカンバの黄、オオシラビソの緑が錦織のように美しい。

この頃より霧雨が静かに降り始める。雨に濡れたナナカマドの赤は一段と深みを増し、いやがうえにも写欲をそそる。

カルデラ展望台に出かけた人は、「十分な手応えがあつた」と満足そうな顔をしている。弥陀ヶ原のガキ田と大目岳にレンズを向けた人は、「凄じ景色だ。来年また来なければならぬ」と嬉しそうに笑う。

やがて参加者は、午後の立山にお別れをして家路に着いた。しかし紅葉に未練の残る人(男六名、女二名)は、もう一晚立山に留まり、フィルムの消費(浪費?)をしている。かくして立山撮影会は無事に終了したのである。

追記

この撮影会に参加された入澤郁夫さんと田邊史さん及び不参加だった石井恵美子さんの三人が、十一月十日に、ネパールのトレッキングで雪崩に遭い、遭難されました。謹んでお弔い申し上げます。合掌。

(石浦邦夫)

味の技、心でつくる

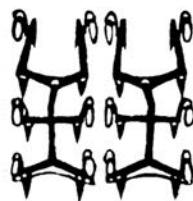


むさし坊 日比谷店
(東宝ツインタワービル9F)
千代田区有楽町1-5-2 ☎03-3504-1905
むさし坊 麹町店
(有楽町線麹町駅)
千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313
むさし坊 神田西口店
(神田西口通り商店街)
千代田区内神田2-9-9 ☎03-3252-5015
友誼ゆうぜん
(半蔵門線半蔵門駅3分)
千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891

むさし坊 番町店 (日本TV通り五番町交差点角)
千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜七枚以内でお願いします)



カット 中村あや

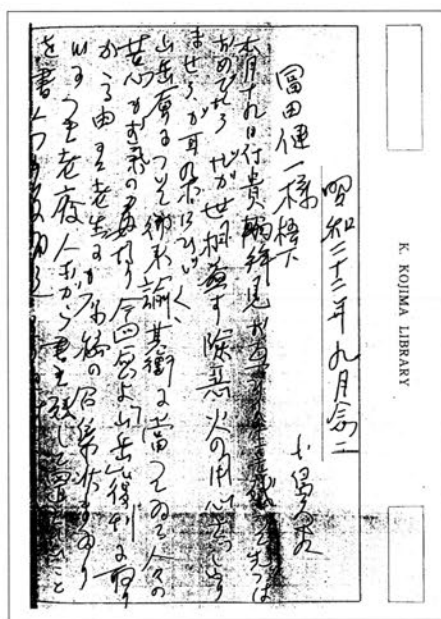
ウエストン追慕の小島烏水翁絶筆

富田 健一

戦後間もない頃、私は日本山岳会創立の原点にあったウエストンのことをいろいろ知りたくて、資料を集めようとした。当然なこととして、ウエストンに最も縁の深かった小島さんに教えることが最重要と考え、かねて戦後の混乱期にあった登山界の動きについても、お考えを伺っておきたくてお便りしたことがあった。間もなく小島さん専用便箋二枚一杯のお返事をいただいたが、それには、ウエストンに対する敬慕と追想の熱情があふれるようにしたためられていた。

ウエストンと小島さんの結びつきについては、武田久吉さんから詳し

く伺ってはいしたが、終戦直後にさえも、なおこのように追慕されている真情に強く打たれたのであった。私は戦前、武田、榎、松方、今西、西堀、藤島さん、その他多くの先輩からお便りをいただく機会に恵まれ、そのすべてを人名別一括、タンスの引き出し一杯に保管していたが、一月の大地震でその大半を失ってしまった。



小島烏水翁自筆の書簡より (一部)

まい、無念の情ひとしきりであった。このことで、小島さんが戦時中、山形の疎開先でウエストンからの多数の書信を失われた無念が痛い程よくわかるのであった。ただ私の場合、昨夏二冊のクリアブックを入手し、一冊にはA・C関係のものを、一冊には小島、榎、浦松、西堀さん等の来信を広げて挟んでおいたのだった。それが幸運にも、家屋解体の前日下見に行ったとき、倒れていたタンス付近から二冊とも拾い上げることができたのであった。そのトップに広げて挟んであった小島さんの私への絶筆(翌年十二月没)の中で「ウエストンに対する感謝と懺悔録を残したい」とされた熱望が、病状進行のためかなわなかったことを、心からお気の毒に思う次第。敢えて謹んでお便りを披露させていただくことにしたのである。

昭和二十二年九月念二
富田健一様
梧下
小島久太
本日十九
日付貴翰拝
見 お互ひ
に生き残っ
て先づはお

めでたう。だが世相益々險惡火の用心さっしやりませうが耳朶にひく。

山岳會について御來論、其衝に當つてゐる人々の苦心もお氣の毒なり、今回愈々「山岳」復刊に取りかゝる由にて老生にも原稿の召集状まゐり候につき老廢人ながら書き残して置きたいことを書くつもりに有之その題材は日本へ来た外人の登山者にして私の親しく遇つた人々即ちスエン・ヘディン、フレッシュフィールド、ジェイムス・ブライス等の印象記に候へ共その内ヘディンを除いては凡べてウエストンの紹介で親しく面晤が出来た次第でウエストンとは切り離し難くウエストンの晩年の孤影蕭條をおもふにつけ私としては盡し方の足らざりしを悔やむこと切に候、ウエストンを縦串として以上の人を横串に刺し又へ私のウエストンに対する感謝と懺悔録起草したいと考へ居候ところへ貴書拝授、ウエストンが後代に知己を得たことを喜び申候(別に私のところへ書状にてウエストンのことを問ひ合せに来る若い人々もポツポツ有之候)恐らくウエストンは英國を除いたら日本で一番有名になつてゐると存ぜられ候。只だ残念なことはウエストンの來狀數十本が

一括して私一家の山形へ疎開中それ等有名人の手書を秘めたる行李と共に紛失してしまったことにて留守中の出来事とは申しながら思ひ切れざる次第に候、とかく老人は自分の不取締を棚へ上げて留守番を歯痒ゆがったりして浅ましく候

斯く前觸れはいたし候へ共老来元氣銷亡動脈硬化氣息奄々にて書けるかどうかは我ながら自信強からず候、毎日午前中は主として書信を讀んだり書いたり午后は敷き放

短歌

霧迅く(秋田駒にて)

大橋克也

霧迅く独りの径を吹き抜ける男岳の尾根に標べ辿れば

山霧は乳色深くケルンをば襲うがごとく包むがごとく

霧迅く男岳の尾根に襲いくる返せば萎ゆる吾に真向いて

関節と筋肉はもはや感じてる霧に消さるる頂遠しと

小石飛ぶ尾根を這いつつ風に耐う戻れば萎ゆる己なりせば

しにした床の中に潜りこみ山の本や美術の本を拾い讀みいたし居候出来ればアルピニストの手記の続篇を執筆し原稿は倅に附与して後日出版界の平常に回復するを待つて遺稿として出版せたく考へ居候がこれも空中の樓閣たらずんば幸ひなり

草々

お見舞ひを謝して近況御報告迄

加藤大道・上高地の版画家

開発秀三

昨年の九月中旬、切手趣味の会合に來場していた古物商が持ってきていた古い葉書類(明治中期から終戦前までのもの)を見ていて、終戦前の上高地郵便局の風景印(風景入り通信日付印)を表側に押印した葉書数枚を見つけ出しました。そして、裏側を見ますと、上高地の風光を魅力的なタッチで描写した色刷りの版画の絵が描かれていました。この版画に惹かれて、その古葉書、全部で八枚を買いました。

帰宅後、改めて見直してみますと、表面に書かれた発信人は、すべて「上高地 山宿 西糸屋 奥原英男」(現・上高地 西糸屋山荘の創業者)とあり、宛先は「銀座一丁目 やま



上高地風景

山のぼり
本日開業
(昭和十四年六月一日)
新條の上高地
河津市廣野町の極
中橋より西へ
山宿の山荘を
目指す



上・加藤大道制作の
版画・上高地風光の
DM 下・上高地風
景の郵便スタンプ
見える

びこ会玉木健弥殿」となっていました。裏面は、二枚は全面版画で年賀状(昭和十四年と昭和十五年)、残りの六枚は、葉書の三分の一が版画、残りは通信文を書く余白となっていて、内三枚は「山の便り 本日開業(焼小屋六月上旬)」を頭にしたもの、昭和十三年、十四年、十五年の五月二十八日付け、郵便局の消印は六月一日付けのダイレクトメールともいふべきものです。その他の三枚は、案内料金、山小屋代の情報とか、キャンプ場に販売する物品の値段、それにキャンプ場荷物を預かり保管していたものを返送しましょうか、という問い合わせなどが書かれています。

これを手して約一か月くらいたつて、上高地「山研」の昨年度の閉所式があり、私も資料委員会のメンバーとして「山研」に行く機会が訪れました。それで、時間的な余裕があれば西糸屋さんを訪ね、これをお見せしようと考えて持参しました。ところが、閉所式の夕食会に、山研委員会の現地委員として西糸屋の現社長・奥原幸さん(八六四六)が出席しておられることがわかりましたので、席上で列席のほかの委員の方々と一緒にこれを見ていただきました。皆さんから、当時としては、新鮮なアイディアとセンスにあふれたダイレクトメールであつたろう、というほめ言葉が聞かれました。そしてこの席で同じく現地委員である豊科町の中野和郎さん(四九八七)から、この版画家は加藤大道という人で、安曇村の村役場の前あたりに住んでいた人ということをお教えられました。

帰宅後、奥原幸さんのお父上、教永さん(現会長)からいただいたお

山の切手④ 一相山之良

日本隊初登頂の山・I



1956年11月3日発行 日本マナスル登頂記念・東南のマナスル氷河からみたマナスル

新年にちなみ、日本隊によって初登頂された山を描く切手を取り上げてみたい。

戦前のアルバータとナンダ・コトは別格として、戦後は経済の飛躍的発展とともに、日本隊の足跡は全世界のあらゆる山におよび、初登頂に成功した山も三百座を超える。そのなかで、切手に描かれた山が九座ある。

マナスル(八二六三メートル)

一九五六年五月九日、植隊長率いる日本山岳会隊によって初登頂され、今年(四十周年)を迎える。ピーク29、ヒマルチュリも日本隊によって初登

頂されており、マナスル山群はまさに日本人の山といっているほどだ。
アビ(七一二三メートル)

一九六〇年五月十日、同志社大学山岳会によって初登頂された。登頂者の一人だったサーダールのギャルツェン・ノルプは、マナスルの初登頂者として勲六等を受賞し、東京都の名誉都民となった。引き続き六〇年秋に、日本女性隊のデオ・ティバの登頂をも果たしたが、六一年大阪市立大学のランタン・リルン登山隊で雪崩に遭い、隊長とともに死亡した。

サイバル(七〇三一メートル)

アビに登頂したとき、頂上の東にサイバルの雄姿を眺め、次の目標をこの山に定めた同志社大学山岳会が、一九六三年十月二十一日、初登頂した。登頂者の平林隊員は、三年前のアビの初登頂者で、北西ネパールの二つの秀峰を制する栄冠を手にした。カンジロバ(六八八三メートル)

一九七〇年十一月七日、大阪市立大学とネパールのトリプバン大学の合同隊が初登頂した。西ネパールは、首都カトマンズからは僻遠の地で、現在でもアプローチが困難なところだが、カンジロバ山群、アビ・ナンパ・サイバル山群での日本隊の活躍には目覚ましいものがある。



1987年12月21日ネパール発行 バトラシ・ヒマールからみたカンジロバ西面



1990年12月24日ネパール発行 南面のサイバル氷河からみた図案だが、写真のネガが逆になっている



1984年12月12日ネパール発行 アビ南面



1961年ネパール発行 日本のものと同じ場所からのマナスル

便りによりますと、英男さんは大道さんとは同年で、同じ島々で暮らした大変仲良しであった由です。大道さんは、初めは日本画家を志して上京しましたが、目を悪くされて版画の道に入られたようで、童画、植物画とも評判がよかったと思います、とのこと。

親友であった二人の間で、この版画ダイレクトメールの生い立ちにつながる、いろいろな話し合いがあったことと想像されます。

また、中野和郎さんからのお便りでは、中野さんのお父上が、戦前、教員時代に親類の大道ファンの方とともに、大道版画を収集されて、六枚屏風二双に、大きいのは五五センチ×三五センチ、小さいのは葉書大まで、合計百八十四枚を表装されて保存しているとのこと、画題は、上高地、穂高岳、槍、カッパ、安曇平の子供等々とのこと。

ともあれ、西糸屋さんの戦前のご活動を偲ぶことのできる資料を掘り出すことができたことを私は嬉しく感じております。

*

この原稿は、大げさに報告するほどのものではないのかもしれませんが、「山研」九五年度閉所式に出席された方々のお勧めがあり、書かせていただきました。

図書紹介



カット 中村あや

右のご著書を賜りましたが、この度ご好意により当会へ寄贈いただきました。図書室に備えてあり、閲覧可能です。実際にご覧になって、皇太子殿下のお人柄の一端にお触れいただければと存じます。

『テムズとともに』は、一九八三年六月から二年四か月、英国留学時の青春の貴重な思い出を七年後にまとめたもので「オックスフォード大学入学」「スポーツ」など十章からなっています。

本書は石と木の文化による視点の違いを指摘されるなど、殿下の視野の広さが感じられます。初めての体験や人々との出会い、新旧を見事に融合させている伝統の国英国でのお暮らしが魅力的に綴られてあり、楽しく、そして充実感のある青春の思い出に満ち溢れています。この中から山に関連することをご紹介します。

滞英二か月を過ぎた頃には「周囲の平坦な景観は山見たさを募らせ、ホームシックならぬ山シックを起こさせていた」。しかしスコットランドへの旅行で「山と湖を擁するレイク・ディストリクトの景観は山シックをいやし、心休まるものであった」。

また、留学先のマートン・コレツジ案内の箇所には「ところで皆様は一九二四年エベレスト山頂に向かったイギリス人登山家マロリーに同行

し、同じく消息を絶ったアーヴィンの名前をご承知だろうか。彼はマートンの学生であり、よくチャペルの壁を登っていたという。マロリーの陰で人生を終えた彼を象徴するかのようにグロウヴにはアーヴィンのモニュメントが目立たずひっそりとたずんでいる」。

「スポーツ」の章には夢であった英国での登山が記されています。スコットランド、ウエールズ、イングランドのそれぞれの最高峰、ベン・ネヴィス（一三四四メートル）、スノードン（一〇八五メートル）、スカイフェル・パイク（九七八メートル）をあくまで「登山」することを念頭におき、登山電車などを利用せずに歩いてお登りになっています。また緯度が高いので「日本で今まで登った山とわりわけ特に高い山で味わう一種のアルペン的なムードを感じた（略）」

大峰山へは洞川から入峰、山上ヶ岳から南下して八ヶヶ岳に至るいわゆる逆峰コース。立ち並ぶ石碑、行場、装束に身を固めた行者と出会った二泊三日、山々の歴史と温もりを肌で感じる登山だった様子です。甲斐駒ヶ岳については「標高差二二〇メートルに及ぶ険しく長大な黒戸尾根コースを選び、刻々と変化する周囲の景色、広葉樹、針葉樹、森林限界へと移行する植生、変化に富む登山道などは実に楽しく、また『粥餅岩』『刀利天狗』といった往時を偲ばせる場所、登山道の所々に点綴するかのような石碑、剣等に信仰の山としての駒ヶ岳の姿をみたような気がした」。

初日は七丈小屋泊、翌朝午前八時に山頂に立たれています。展望をほしいままにするとともに、「疲れは全くといっていい程なく、むしろ同じ登山道を辿った多くの先人の足跡を偲びつつ、長い距離を歩き終えた満足感でいっぱいであった。これが信仰の山登山の醍醐味であると改めて思った」とお書きになっています。単に山頂に立って満足感を得る山行とは別に、その山の歴史を知り、自然と対話をしながら登山すれば、ひと味違う山行のできることをご教示いただいたように思います。

『テムズとともに英国の二年間』

一九九三年二月 学習院総務部広報課刊 学習院教養新書 二一六ページ 非売品

『修験の山を訪ねて』

一九九一年六月 山岳修験学会刊「山岳修験」第七号（十周年記念号）抜き刷り 非売品

村木会長は日本山岳会九十周年記念晩餐会において、皇太子殿下から

「山と信仰・立山」

広瀬誠・清水敏・共著

広瀬氏は旧い会員で、県立図書館長・富山女子短大教授を歴任された県内有数の歴史学者である。とくに万葉、古事記に傾倒、立山、白山について、はかり知れない造詣をおもちである。清水氏は県ナチュラリスト協会長も歴任されている。

本書は、両者がそれぞれ得意分野を主として分担し、歴史、伝説、宗教、自然などあらゆる分野について集大成したものである。専門家にありがちな晦渋を避け、平易な記述に徹しており、非常に読みやすい。囲み記事が多いのも特色で、肩の凝らない面白さが、ピリツときいている。本書のような山の解説は今までなかったもので、いろいろな山についてもうしたまとめかたは、今後一つの方向と考えられる。

行間に溢れる故郷の山、立山への限らない愛情は、日本古来の山と人との関わりを思い起こさせる。

(藤平正夫)

一九九五年六月 佼成出版社発行
二四五ページ 千八百円

佐伯富男追悼集編集委員会・編

「芦峠の自然児・トンコ」 —佐伯富男追悼集—

すでに、平成七年七月十五日付け朝日新聞スポーツ欄で、「山のご意見番」しのび追悼集、というタイトルで紹介の記事が書かれているが、再度紹介することにする。

第一部では、遺稿・私信などをまとめており、自然保護に関する記述が多く見られる。とくに立山地域の現実には則した自然保護を佐伯さんは考えていたようだ。また、遭難の多い剣岳の入山に関して、登山指導員の立場以上のアドバイスを登山者にしていたようだ。

第二部は「追悼」と題して、各界の多彩な方々五十八人の追悼文がまとめられている。佐伯富男さんの交際の広さ、深さと人となりは今更ながら偲ばれる。

できれば「山のご意見番」だけでなく「酒のご意見番」に、もう少し早くなってほしかった。(茂見 猛)

一九九五年四月 講談社出版サー
ビスセンター・制作 三六三ページ 二千五百円

次代に残そう美しい山と溪

書籍受入報告 (1995年11月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入
住谷雄幸	江戸百名山図譜	279pp/22cm	小学館	1995	出版社寄贈
岩田修二 他(編)	世界の山やま: アジア・アフリカ・オセアニア編(地理Vol. 40, 通巻476号)	163pp/26cm	古今書院	1995	出版社寄贈
岩田修二 他(編)	世界の山やま: ヨーロッパ・アメリカ・両極編(地理Vol. 40, 通巻478号)	165pp/26cm	古今書院	1995	出版社寄贈
佐藤正樹(編)	コスタ・リカ: 山と自然の会 報告 1988-1991	81pp/26cm	山と自然の会	1995	出版社寄贈
小西節浩	遠い日近い日	519pp/23cm	小西節浩(私家版)	1995	著者寄贈
台湾・高峰遍歴隊'95(編)	北大武山登山報告書(1995. 4/29-5/7)	24pp/27cm	台湾・高峰遍歴隊'95	1995	発行者寄贈
もりきよし(原編)	日本十進分類法(新訂9版): 一般補助表・相関索引編	435pp/22cm	日本図書館協会	1995	岩淵泰郎氏寄贈
もりきよし(原編)	日本十進分類法(新訂9版): 本表編	418pp/22cm	日本図書館協会	1995	岩淵泰郎氏寄贈
橋本實(編)	厳冬期・尾瀬・奥日光縦断行(1952. 12/26-1953. 1/14)	40pp/26cm	学習院輔仁会山岳部	1995	発行者寄贈
平山善吉 他(編)	追悼集: 青木・西田・森田・牛奥の四君を偲んで	175pp/19cm	日本大学 平山善吉	1995	日大坂門山岳会寄贈
薬師義美(編)	ヒマラヤ文献目録・新版(追加・訂正版)	169pp/26cm	薬師義美(私家版)	1995	編者寄贈
佐伯邦夫	佐伯邦夫の山とスキー大全	321pp/22cm	シー・エー・ピー	1995	発行者寄贈
市川正(編)	白稜: 東京白稜会・創立50周年記念号	434pp/26cm	東京白稜会	1995	発行者寄贈
東京都立中央図書館(編)	類縁機関名簿(1995年版)	291pp/30cm	東京都立中央図書館	1995	発行者寄贈
大森薫雄	雲の上の診療所: 慈恵医大槍ヶ岳診療所45年の記録	238pp/19cm	いしずえ	1995	出版社寄贈
平野秀吉	日本アルプス登山案内記	201pp/18cm	斯文書院	1929	久野行雄氏寄贈
大関保	ネパールヒマラヤの旅	397pp/20cm	穂高書店	1995	著者寄贈
古谷聖司 他(編)	丹水(第2号): 日本山岳会丹水会15周年記念誌	218pp/22cm	日本山岳会・丹水会	1995	発行者寄贈
島本達夫(編)	関東周辺の山: 紀行集	349pp/19cm	白山書房	1995	出版社寄贈
廣川健太郎(編)	アイスクライミング(増補改訂版)	272pp/19cm	白山書房	1995	出版社寄贈
熊谷樞	アルプスの氷河を滑る(画文集)	251pp/19cm	白山書房	1995	出版社寄贈
Pan Chien-Hung (photo)	Harmony in the Mountains: A Photo Collection of the Yangmingshan National Park	95pp/26cm	Yangmingshan National Park	1993	台湾・高峰遍歴隊寄贈

登場するグリーンランドの旅が本書の題名となっている。

全文を辛口の特徴ある榎さん口調で貫いていて、一気に読ませる。あとがきに著者は次のように記している。「スタンダードの碑文にちなんで『生きた、描いた、恋した』と墓石に刻まれるように生きたい」と……。

この画文集を出すためにはそうとうの苦労があったようだが、自費出版でも続けたいという著者の意気込みは、行間からも、スケッチからも感じ取れる。

(佐藤知恵子)

一九九三年六月 白山書房発行
二二二ページ 二千元

群馬県山岳連盟・編

『母なる大空』

冬期サガルマータ南西壁

一九九一〜九二／一九九三〜九四

九三年十二月、世界初、冬期サガルマータ南西壁が登られた。群馬県山岳連盟が冬のヒマラヤを目指し、究極の冬期サガルマータに至るまでの経緯、烈風に阻まれた第一次南西壁の反省の上に組み立てられた第二次遠征計画、そしてその登攀の様子は、一ピッチ、一ピッチ、自分が登っているかのような緊迫感で引き込まれてしまう。

装備、食料、輸送、気象等々の記

述は、遠征を計画する人たちの参考になるだろう。また隊員それぞれの記は、山の様子、登山の様子を個性豊かに知らせてくれる。最強の登山隊が、最強のタクティクスで挑んだ南西壁の報告書である。(渡邊玉枝)

一九九五年八月 群馬県山岳連盟
発行 三八四ページ

宇都木慎一・編

『関大山岳部の七十年』

創部七十年記念誌

一九二五年(大正十四年)当時の樺太や九州島遠征、八方尾根のウサギの肉入りカレーライスなどの古きよき時代にはじまり、アンデスやマナスルIV峰遠征などを編年史的に回想・報告している。中でも昭和初期に集中的に積雪期の後立山側から黒部横断を試みており、成果をあげているのは注目値する。

巻末に現役部員のエッセイを載せている。若い人たちの自由闊達で元氣あふれる姿勢が好ましい。こういう活きのよい部員がいる限り、関大山岳部の伝統は受け継がれ、新しい発展をしていくことは間違いないだろう。

(松沢節夫)

一九九五年九月 関西大学体育会
山岳部・関西大学山岳部OB会
発行 三四三ページ 非売品

書籍受入報告(1995年12月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入
愛知学院大学山岳会(編)	エベレスト・サウスピラー	200pp/19cm	成文堂	1995	発行者寄贈
深野稔生 他	山スキールート図集(改訂)第1集	203pp/19cm	白山書房	1994	購入
宮沢醇 他	山スキールート図集(改訂)第2集	220pp/19cm	白山書房	1994	購入
辻村太郎	地形學	610pp/23cm	古今書院	1929	久野行雄氏寄贈
辻村太郎	日本地形誌	455pp/23cm	古今書院	1930	久野行雄氏寄贈
木崎甲子郎	ヒマラヤはどこから来たか: 貝と岩が語る造山運動(中公新書1190)	173pp/18cm	中央公論社	1994	山本健一郎氏寄贈
隅田正三	チベット探検の先駆者・求道の師「能海寛」	221pp/27cm	波佐文化協会	1989	山本健一郎氏寄贈
菰野山岳会(編)	SHUKRIA: 菰野山岳会シスパーレ峰登山隊1994報告書	88pp/26cm	菰野山岳会	1995	発行者寄贈
立松和平	神様のくれた魚: ヤポネシア抒情紀行	269pp/20cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
下平廣恵	日本アルプス: 上高地を中心として	112pp/19cm	北信書房	1946	久野行雄氏寄贈
細川呉港	満ちてくる湖: The Flowing Lake	328pp/20cm	平河出版社	1995	出版社寄贈
小荒井実	山楽百花: 自然のフォーカス	206pp/22cm	歴史春秋出版	1995	著者寄贈

*1月号掲載の11月受入書籍のうち大関保(著)は「ネパールヒマラヤの山旅」の誤りでした。お詫びして訂正します。

INFORMATION



◆登山技術研修会のご案内

指導委員会

本委員会では平成七年度より『日本を代表すべき山岳会の名に恥じない登山活動の実践とそれを行う登山家の育成』を目標に、登山技術研修会を行います。今年は一年目ということで試行錯誤による未熟な点も多いかと思いますが、会員諸兄が積極的に参加されることを期待します。

詳しい内容をご希望の方は官製葉書に会員番号・氏名・住所と希望する計画の番号を明記して、日本山岳会指導委員会担当理事・熊崎和宏宛にお送りください。

一、アイスクライミング研修会

日時 平成八年二月三日(土)～四日(日)
場所 ハケ岳赤岳ジョウゴ沢周辺
目的 ダブルアックスクライミングの技術及び氷壁での確保技術の修得

対象 積雪期登山経験二年以上かつ岩登り技術が中級以上の方

対象 大学山岳部リーダー、OB
二、山岳スキー技術研修会

①初級者対象研修会

日時 平成八年三月二十三日(土)～二十五日(月)

場所 菅平・根子岳及び四阿山周辺
目的 山岳スキーによる登下降技術の習得を中心としてビバーク技術・危急時対策など冬山総合技術の習得(旅館泊)

対象

スキー初心者又は積雪期登山経験二年以上、積雪期登山初心者又はスキー技術がシュテムタイン以上であること

②中上級者対象研修会

日時 平成八年四月十三日(土)～十五日(月)

場所 谷川岳周辺
内容 山岳スキーによる登下降技術の修得を中心としてビバーク技術の習得(雪洞・ヒバークを含む)

対象 積雪期登山経験が二年以上かつ山岳スキーの技術がシュテムタイン以上であること

③上級者対象研修会

日時 平成八年五月三日(金)～六日(月)
場所 剣岳周辺
内容 山岳スキーによる登下降技術の修得を中心として雪稜登攀技術・ビバーク技術・危急時対策など積雪期登山の総合技術の修得

対象 積雪期登山経験二年以上かつ岩登り技術が中級以上の方

対象 指導委員会及び委員がとくに推薦する者

◆第二十四回山岳史懇談会

日時 平成八年二月二十三日(金) 十八時三十分

場所 山岳会ルーム
演題 日大「桜門の山」を語る

講師 崎田 熙氏・松田雄一氏ほか

◆第二十七回山岳図書会

日時 平成八年三月一日(金) 十八時三十分

場所 山岳会ルーム
演題 「スイス山案内人の手帳より」をめぐって

講師 岡澤祐吉氏

◆山の映画(ビデオ)とお話の夕べ

日時 平成八年三月五日(火)
場所 山岳会ルーム
会費 五百円(お茶菓子代)

作品 福原フィルムス提供
雲炎「風と語る男たち」

解説 制作こぼれ話・近藤隆治氏
お話 「山岳映画を撮ろう」アマチュアビデオ愛好家のために

講師 羽田栄治フィルムビデオ委員

◆岩橋崇至写真展「名水・黒部の流れ」と岩橋崇至ギャラリートーク
日時 一月二十五日(木)～二月二十日

(火) 十時～十八時 木曜休館
ギャラリートーク・一月二十七日(土)十四時

場所 富山県黒部市国際文化センター「コラーレ」入場料三百円

問合せ 同センター・石川 TEL 〇七六五・五七二・二〇一

◆ヨセミテ紀行96ご案内

自然保護委員会・山の自然学研究会
日程 九月六日(金)～十六日(月)

講師 小泉武栄氏(学芸大学教授)
費用 三十万円前後(航空券を含む)

参加 「山の自然学講座」受講者を優先しますので、関心のある方はぜひ講座へのご参加を。

・第四十三回 二月十七日(十三・十七時)・蔵前工業会館
・第四十四回 三月十日 高尾山

申込 山岳会事務局 大森弘一郎宛
◆お花見ハイクのご案内

日時 平成八年四月十四日(日)
場所 箱根(明神岳・明星が岳・温泉)

集合 伊豆箱根鉄道大雄山駅前九時
申込 会員番号・住所・氏名・電話番号を明記の上、返信用封筒に八十円切手を添付し、封書で二月二十九日までに星野幸太郎宛(〒二五六 藤沢市湘南台二一三八・一五)

問合せ 〇三・三九九三・三三五一
森田英昭へ(十八時以降)

会務報告

十一月理事会

日時 十一月九日(木) 十八時三十五分～二十時二十分

場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕 村木会長 宮下 中村 各副会長 大屋 吉永 中川 水野 南井 堀井 渡邊 溝口 田邊 宇田川 熊崎 大蔵各理事 石橋監事 小倉 大倉 村井 大森 神崎各常任評議員

〔委任〕 斎藤副会長 大谷 松浦 伊藤 山本各理事 川崎監事 重廣 常任評議員

【審議事項】

(一)一九九八年度国際登山医学学会総会名義後援の件 大屋

スイスに事務局をおく「国際登山医学学会 (ISMM)」から一九九八年度総会日本開催の要請打診があり、一九九五年日本登山医学研究会総会において承認。これは日本の登山者全体にとっても有益と信じ、中島道郎総会会長から名義後援の要請がなされた。承認

(二)「田部井淳子展」名義後援の件 承認

平成七年十一月二十五日(出)十二

月三日(日)、福島トヨペット郡山鳴神店ショールーム(入場無料)で開催するにあたり、「田部井淳子展」実行委員会高橋敏雄委員長より名義後援の要請がなされた。承認

(三)写真展名義後援の件 大屋

平成七年十月十一日(水)～十月二十二日(日)、京都市美術館において岩橋崇至「白頭山写真展」白頭山の四季」同時併催「朝鮮歴史美術展」の開催にあたり、日朝文化フェスティバル実行委員会より名義後援の要請がなされた。承認

(四)シンポジウム名義後援 宇田川

十二月十六日(土)午後一時～五時、東京代々木オリンピック青少年総合センターにおいて「冬山遭難事故・雪崩シンポジウム」開催にあたり、主催の日本レスキュー協議会より名義後援の要請がなされた。承認

(五)九十周年合同募金現況(十一月六日現在) 石橋

・会員募金 延べ千五百三十六名 二千八十六万九千六百三円
・企業募金 百三十社(団体) 二千四百九十五万円 承認

(六)山岳傷害保険導入の件 中川

山岳団体においても取り組まれてきたが、今般、本会宛てに二十名以上まとまれば団体扱いなどの打診があった。登山(国内登山・トレッキング

グ海外登山)の範囲、保険料などについて今後研究し、導入については信用問題にもなるので、さらによく検討し、有利なものとするよう取り組んでゆく。継続審議

【報告事項】

(一)九十周年記念事業結果報告 大屋

十月十四日(土)の記念フォーラム・記念式典・晩餐会などの担当理事は、各部門別に反省点などを箇条書きにして二週間以内に提出されたい。それをまとめて保存する。同好会については総務理事が当たる。

(二)九十周年記念事業収支報告 吉永

本部記念式典関係収支は別紙のとおりである。マカルー登山の支出は終わっているが収入部分で未収がある。合同募金もまだ期間が残っている。「山岳」に掲載できるように現在努力中である。

(三)平成七年度上半期監査の件 石橋

十月二十五日財務担当理事立ち会いのもとに、川崎、石橋両監事により監査の結果、記帳は正確であり、支出は妥当であることを認める。

(四)総務担当より

・会員名簿の発行については、前回発行後三年経過にあたり、年度内発行(「山岳」と同時発送)の予定で進行中。各理事においても費用節約のため広告募集の努力をお願いする。・今期の役員名簿については、十一

月二十二日に印刷終了の予定である。・十一月十八日(土)ルームにおいて、秋の新入会員オリエンテーションを開催する。現在新入会員六十二名の出席申し込みがある。各理事にも出席をお願いする。

・現在、本会には各部門の同好会が十二部会存在する。各委員会には担当理事が専任で会の意向が伝達されているが、同好会には疎遠である。そのため平成七年十一月十六日(木)に総務担当理事(大屋、中川)と同好会事務担当者で連絡会議を開催する。・各同好会の名簿はJAC事務局に保管してある。各理事の閲覧可能である。

(五)「山岳」発行の件 田邊

平成八年一月になる予定。発送方法など、検討中である。

(六)マカルー登山の件 大倉

現在、報告書の取りまとめ中である。会計については募金の未収金の入金を待って「山岳」に報告掲載を予定している。

(七)百年史の件 南井

九十周年記念本部式典終了後の現在、古参会員に往時の話を伺い、覚え書きとして収集中である。

(八)自然保護全国集会の件 大蔵

平成七年十月十五日(日)、日本山岳会ルームにおいて、平成七年度自然保護全国集会を、宮下、中村両副会

長ほか四十三名(十一支部より支部自然保護委員)の出席で開催した。主議題①鳥海山問題 ②白神山地立ち入り禁止問題 ③国営アルプスあずみ野公園問題 ④屋久島問題など。(九)青年部より 宇田川

・平成七年十一月十八日(土)十四時十九時、代々木全理連ビルにおいて山岳部監督会議を開催する。現在参加申し込みは九州・関西・東北より二十八校、約七十名の予定。

・十二月六日、青年部懇談会としてOB・現役の参加で懇親会を開催。

(十)山研委員会より 溝口

平成七年度の宿泊者は八百四十八名であった。収支決算終了後報告書を提出する。

(四)H A T Jより 神崎

田部井淳子代表の総理大臣賞の受賞を祝う会を十一月十五日(水)、十八時より日本スポーツマンクラブ(渋谷区の岸記念体育館内)で開催する。本会からも多数の出席を望む。

(五)財務担当より 吉永

平成八年度予算概算要求書を出すので、各委員会担当理事において対処をお願いする。

【委員会報告】

●総務委員会 十月十四日(土)、九十周年記念晩餐会(新高輪プリンスホテル)・参加者七百六十名。十一月十八日(土)、オリエンテーション・ル

ームにて新入会員六十二名出席予定。会員名簿は近月発刊予定、広告を載せるので協力をお願いしたい。役員名簿は十一月末までに発行予定。

●集会委員会 十月十五日(日)、記念晩餐会後の山行・丹沢三ノ塔、百名参加。一月十三日・十五日、磐梯高原・沼尻温泉親睦スキー大会。

●科学研究委員会 シンポジウム・「最近の山岳通信の進歩」を十二月二日(土)十三時三十分～十七時三十分青山学院大学総合研究所ビル十一階一九号会議室にて開催。会費千円。

演題と講師 ①従来の山岳通信網について(アマチュア無線の利用を含めて) ②電気通信大学名誉教授・本会会員・芳野超夫氏 ③移動電話の活用と通話地域の検索及び人工衛星を利用した近い将来の移動通信 ④N T T移動通信網(電波部長・酒匂一成氏 ⑤GPS衛星による位置の決定及び今後の新技術の山岳通信への応用 ⑥日本無線(株)研究所部長・北条晴正氏 ⑦気象衛星による雲写真のリアルタイム受画 ⑧エーオーアル取締役根岸秀忠氏 ⑨パネル討論

●会員異動

物故
皆川孝平(五三二八) 7・9・18
住吉 薫(三八四二) 7・9・26
飯野 信(七四一七) 7・10・19

入澤郁夫(四〇三四) 7・11・10
田邊 史(八八五〇) 7・11・10
石井恵美子(九六二四) 7・11・10
今西壽雄(二六四九) 7・11・15
高橋長助(五八四二) 7・11・18
佐藤 力(二二〇一〇) 7・11・20
退会
荻野信二(九六五七) 7・11・30

ルーム日誌

11月 青年部 山学研究会
1日 学生部
2日 総務委員会 フォトビデオクラブ
6日 アルパインスケッチクラブ
7日 常務理事会 ジャック93会
8日 百年史委員会
9日 理事会 集委員会
10日 学生部 山学研究会
13日 図書委員会 アルパインスキークラブ
14日 フィルムビデオ委員会 青年部 二火会
15日 三水会 アルパインスケッチクラブ
16日 総務委員会 学生部
18日 新入会員オリエンテーション
20日 総務委員会
21日 遭難対策委員会 緑爽会

22日 山研委員会 指導委員会
27日 科学委員会 資料委員会
ルパインスキークラブ
28日 自然保護委員会
29日 海外委員会
30日 学生部
11月来室者719名

◆編集後記◆

◆一九九六年は明るい年を、の願いを込めて明けた。会報は会員の皆様方のご協力のもとに、とどこおりなく発行して参りましたが、今年もよろしくお願い申し上げます。

◆会報の原稿は会員の皆様方がどしどしお寄せくださり、原稿不足の悩みはありません。ただ時には長すぎたり、読みにくい原稿があり、当方で文意を損なわない程度に手を入れることがあります。また原稿は必ず左記に送ってください。

〒二七七 柏市豊四季十六四六一一
五七 伊藤 敏宛 (伊藤 敏)

日本山岳会会報 山 608 号

1996年(平成8年)1月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
振替口座 東京3-4829
発行者 村木潤次郎
編集人 伊藤 敏
印刷 株式会社 双陽社